

第38回

# 社会福祉実践家のための 臨床理論・技術研修会 報告書

## 目 次

|                           |                          |    |
|---------------------------|--------------------------|----|
| 巻頭言                       | 社会学部附属研究所 相談・研究部門主任 三輪清子 | 1  |
| 1. 第38回(2024年度)実施要項       |                          | 2  |
| 2. 研修会内容                  |                          | 2  |
| 〈講演&ワークショップ〉              |                          |    |
| ソーシャルワーカーの「理想」と「現実」       |                          |    |
| ～「ライフヒストリー」から見える輝きと強さを知る～ |                          | 3  |
|                           | 神奈川県立保健福祉大学 川村隆彦         |    |
| 3. 参加者の基本属性・アンケート結果       |                          | 12 |

2025年3月

明治学院大学社会学部附属研究所



# 巻 頭 言

明治学院大学社会学部附属研究所  
相談・研究部門主任 三 輪 清 子

本年度の「第38回社会福祉実践家のための臨床理論・技術研修会」は、川村隆彦先生（神奈川県立保健福祉大学）をお招きしました。当日は、「ソーシャルワーカーの『理想』と『現実』～『ライフヒストリー』から見える輝きと強さを知る～」というテーマのもと、川村先生による講演とワークショップが行われました。ワークショップという性格上、定員を30名に区切らせていただきましたが、早い段階で定員に達し、川村先生の講演とワークショップへの期待の高さを感じました。

今回は、川村先生からご提案いただき、事前に受講予定者に課題が出されたり、またワークショップでは「タワー」を作るため、バラエティに富んだ小物をスタッフが集めたり…研修参加者のみならず、私たち主催者側も「どんな研修になるのだろうか?」「一体タワーって…?」と当日を楽しみにしていました。

当日は、緊張と期待が入り混じった顔の参加者を迎えながら、私たちもおそらく同じような顔をしていたと思います。時間を忘れさせてくれるような、ゆったりとした、やわらかい雰囲気の中、川村先生の講義とワークショップが始まり、その場にいた人たちは、最初は恐る恐る、でもだんだんと徐々に打ち解けていきました。

参加者の中には遠方から来られた方も複数人いらっしゃいました。また後述するアンケートにも記載されていますが、実践現場において、1年目の方から16年以上ご活躍されている方までさまざまでした。多様な方々のご参加は、研修会への期待の表れであると思います。実際、研修会は、実践現場において理想や現実、その葛藤が続く中、疲れてしまった「自分」を癒やし、エンパワメントされるのに十分な内容だったのではないのでしょうか。ただエンパワメントされるだけでなく、今の自分にどのような力があるのか、ワークショップの中で体験的に学び再確認することができたように思います。

本報告書は、研修に参加できなかったみなさまにも、どのような研修会であったか、その内容をお伝えできるように記述されています。ワークショップのように体験的に学ぶことは難しいですが、ワークショップを体験された方々がどのようなことをして、そして最後にどのようなタワーを作られたのか、写真も掲載しています。川村先生は常に短い言葉で分かりやすく、力強く語ってくださいましたが、そのごく一部もご紹介しています。研修会に参加されたみなさまも是非ご覧いただき、あの時の気持ちを振り返っていただければと思います。最後に、川村先生、参加してくださったみなさまに、深く感謝申し上げます。

## 1. 「第38回社会福祉実践家のための臨床理論・技術研修会」実施要項

|   |   |   |  |
|---|---|---|--|
| テ | ー | マ | ソーシャルワーカーの「理想」と「現実」<br>～「ライフヒストリー」から見える輝きと強さを知る～ |
| 日 | 時 |   | 2024年11月30日（土） 13:00～16:00                       |
| 場 | 所 |   | 明治学院大学白金キャンパス                                    |
| 対 | 象 |   | 社会福祉実践者（本学卒業生含む）                                 |
| 定 | 員 |   | 30名 要事前申込、先着順                                    |
| 内 | 容 |   | 講師による講演およびワークショップ                                |
| 講 | 師 |   | 川村隆彦先生（神奈川県立保健福祉大学）                              |
| そ | の | 他 | 参加費無料  |

### 〈企画主旨〉

本研修は、理想と現実の狭間にいるソーシャルワーカーが理想を見失うことなく歩いていくための力を身につけ、希望のあるキャリアの道筋を描くことができるようになることを目指す。ソーシャルワーカーはどのような理想をもって仕事に臨み、どのような現実に直面して傷つき、苦しむのか、そしてジレンマや葛藤を乗り越えるためにどのような努力をしているのかを共有することにより、自身のエンパワメントを促し、その力がクライアントの利益にもつながることを想定する。

## 2. 研修会内容

### 〈講演&ワークショップ〉

ソーシャルワーカーの「理想」と「現実」

～「ライフヒストリー」から見える輝きと強さを知る～

川村隆彦 神奈川県立保健福祉大学

## ソーシャルワーカーの「理想」と「現実」 ～「ライフヒストリー」から見える輝きと強さを知る～

川 村 隆 彦  
神奈川県立保健福祉大学

---

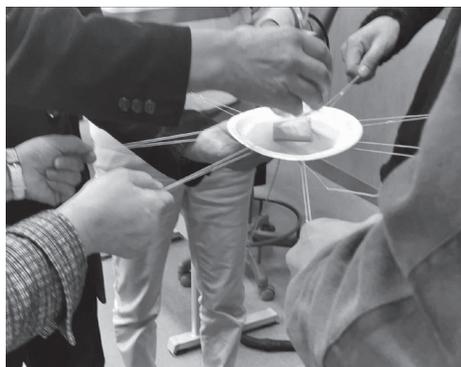
参加者30名は事前に割り振られた6つのグループ（グループA～F）ごとに着席しました。1グループは5名です。机の上にあるラベルシールに「呼んでほしい名前」と「好きな飲み物」を書き、他の参加者に見えるように貼っていただきました。

川村隆彦先生は「現実に向き合うには力が必要です。私たちはその力をもっているのだけれども、多くの人は自分でどれくらいの力があるのかを忘れてしまう。それで改めて私たちの中にどういう力があるのか、確認しましょう」と切り出しました。研修会は、その力を感知取るための3つのワークで構成されていました。

### ・ワーク1 命の水を家まで運び届ける

最初に行ったのは、「命の水」を運び届けるというワークでした。

紙皿に均等の間隔で小さな8つの穴が開いており、その穴に8本の糸がついていました。紙皿の上にコップが置いてありました。紙皿とコップはそれぞれ3つずつ用意されていました。川村先生がそのコップに「力を与える」意味で、水を注ぎました。



その紙皿とコップを、2つのグループがチームになり（グループA&B、C&D、E&F）、メンバー全員で運ぶというワークを行いました。各メンバーは5名、糸は8本であることから、誰かが2本の糸を持つことになりました。前半のグループ（グループA、C、E）が教室の前方からスタートしてこの水を運び、教室の後方で後半のグループ（グループB、D、F）にバトンタッチして、教室を1周して再び前方に戻ってきたら、机の上にある芝生の絵の上に着地させる、という手順でした。

川村先生はルールとして、水を運ぶときには命の水をずっと見続けること、そして先生が「できますか」と尋ねたら「できます」と答えることを提示されました。

グループごとに定位置についたメンバーたちは、先生からの「できますか」のかけ声に、最初はやや戸惑いながら「できます」と小声で答えていましたが、何度か問われるうちに、自信に満ちた声で応答するようになっていきました。

いよいよ実際に水を運び始めました。まずAグループのメンバーが紙皿の糸をもち、水がこぼれないように紙皿を水平に保ちながら、教室の前方をスタートしました。メンバーで協力し合い、水をこぼさずに守り切るという目標のもと、ゆっくりと慎重に進んでいきました。教室には各グループの机と椅子が置いてあったので、水がこぼれないように注意しながら運ばなくてはなりません。メンバーたちは「後ろの机にぶつかるよ」や「紙皿をもう少し高く持ちましょう」などと声を掛け合い始めました。5名のメンバーは小さな輪になる方がよいと気づいて、互いの距離を狭めていきました。Cグループ、Eグループも、順次、スタートしました。

教室の後方には、次のグループのメンバーが待っていました。AグループのメンバーからBグループのメンバーへ空中で一人ずつ交代して糸が引き継がれ、命の水が手渡されました。役割を終えると、Aグループのメンバーから歓声が上がりました。交代したBグループのメンバーも同じように水を守り切るという役割と責任を果たしながら、教室の前方まで水を慎重に運びました。そして机の上に置かれていた家の庭にある芝生の絵の上に無事に運び届けると、AグループとBグループのメンバーが歓声を上げて拍手しました。メンバーたちは安堵とともに、協力してやり遂げたことに対する達成感を感じたのではないのでしょうか。同じように、後半のグループであるDグループ、Fグループのメンバーも、教室の後方で命の水を受け取り、教室前方まで運び切りました。

### ・自己紹介とワーク1のふりかえり

ワーク1終了後、川村先生は、各グループ内で自己紹介を行い、また、水を守るためにしたこと、お皿・コップ・糸の役割が何であるか、着地点である家は何だったのか、を話し合うように参加者に伝えました。

話し合いの後、川村先生は「理想や現実に向き合うときに必要な力には8つある、と皆さんに伝えてあります。皆さんの机に八角形の紙があります。どの色の紙でも構わないので、その角毎にその力を書き込んでください。そして、その力を皆さんと確認していきたいと思えます」と話されました。参加者は、先生のエンパワメントの8つの力のレクチャーを受けながら、八角形の紙にそれぞれの項目を書き込みました。

### ・エンパワメントの8つの力 (レクチャー)

川村先生は、「8つの力」について下記のように説明されました。

#### 信頼

怖れの気持ちに打ち勝ち、前進するために、人は信頼という力を使う。実際、あらゆる場面で、人は自分や他者を信頼しながら生きている。信頼は恐れを克服する力であり、不足すると、人生において前進でき

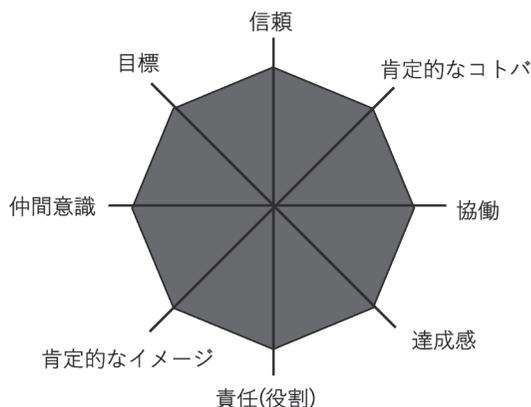


図1 エンパワメントの8つの力

なくなる。

### 責任（役割）

責任とは、信頼に応え、支えようする力だ。責任が多かったり、重かったりすると、苦しいことも事実だ。しかし責任を果たそうとする人は、確実に力を出している。果たすべき責任が何もない人生は楽かもしれないが、もっている力は失われてしまう。

### 仲間意識

仲間意識は、英語ではSense of Belongingで、何かに帰属する感覚のことだ。「私は大切な仲間の一員だ」という気持ちである。シンプルに言えば、友達存在であり、彼らとの居場所のこと。友達が一人でもいれば、人は強められる。もっと多くの仲間がいて、その一員であると感じるなら、さらに強められ、力が湧いてくる。

### 協働

誰にとっても仲間は必要だ。しかし、ただ隣の人と一緒に座っているだけで、自然と仲間になれるわけではない。何かを一緒にすることで仲間になれる。そのために協働がある。どんなに小さなことでも、一緒に何かをする経験を増やすなら、仲間との関係が深まる。そして仲間になることで、さらに一緒に何かをしたいと思う。だから仲間意識と協働は対になっている。

### 目標

大きさにかかわらず、明確な目標はパワーを生み出す。人は目標に意識を向ける過程で、自らの力を集め、それを活用するからだ。個人の目標に加え、チームの目標があれば、さらに仲間と一致して協働する原動力となる。

### 達成感

物事を達成したとき、人は自己肯定感や有用感、自分が成長できたという満足感を覚える。一人だけではなく、チームで仲間と一緒に経験する達成は、さらに大きな喜びとパワーをもたらす。目標や達成感は、スポーツの世界に限らない。どの分野であれ、目標に向けて努力を傾け、達成できたときの気持ちは同じだ。

### 肯定的なコトバ

「コトバ」には、言語、非言語の両方の意味、肯定、否定、両方の力が含まれる。私たちは「コトバ」によって、人を励まし、助け、自信を与え、心を開き、癒すこともできれば、ナイフのように傷つけることもできる。

### 肯定的なイメージ

肯定的なコトバは、肯定的な自己イメージ、否定的なコトバは、否定的な自己イメージをつくる。特に、経験した出来事とコトバが結びつくとき、強力な自己イメージが完成する。

だからクライアントの小さな達成に対して、肯定的なコトバでフィードバックするなら、それらは素晴らしい記憶として脳に刻まれ、肯定的な自己イメージとして、生涯、人生を支える土台を築く。

参加者全員で、命の水を運ぶのにこれらの力を使ったこと、私たちはこれらの力もっていることを確認しました。

### ・ワーク2 ラップバトンリレー

次に、参加者全員で一つの円になり、台所で使うラップを隣の人に渡して5周するというバトンリレーのワークを行いました。先生が「どのように渡すのも自由です」と説明されると、参加者は比較的ゆっくりと確実にラップを左隣りの人に手渡し始めました。慣れてくると、少しスピードが速くなりました。5周を回し終えた時のタイムは、1分23秒37でした。



先生は「ちょっと遅いなーって思ったんですが、皆さん、本気出しましたか（笑）」と投げかけて、2回目のリレーを行うことになりました。2回目は、ラップを手渡すときに「はい」と声を出すなど、自主的な取り組みが見られました。2回目の5周を終えた時のタイムは1分15秒85でした。1回目より速くなったことで、参加者は拍手して喜びました。

先生はすかさず「これより速くできますか」と尋ねてきました。参加者の多くは「これで無事に終わり」と思っていたのか、誰も返事をしませんでした。先生が「できますか」と再度尋ねると、「できます」と答える参加者が出てきました。先生は「じゃあ、もう引けないですね。では、どうしたらもっと速くなるか、グループごとに話し合ってみてください」「皆さんで1秒でも貢献できればいいじゃないですか」と励ましました。それぞれのグループのメンバーは、ラップを手渡すときの身体の向きや声かけ、隣の人との距離を縮めるなどの工夫を考えだしました。

3回目スタートしました。2回目の時よりもタイムを短くしたいという思いから、途中、焦って危うくラップを落としそうになった参加者もいましたが、みんなで声かけをして5周を回しきりました。3回目のタイムは1分3秒49となり、1回目より20秒、2回目より12秒も縮まりました。参加者全員で大きな拍手をして喜びました。

### ・ワーク2のまとめ～「エンパワメントの8つの力」と「心の3層構造」

先生は、バトンリレーのワークの経験を通して、参加者が「エンパワメントの8つの力」を使っていたことを強調なさいました。「自分を信頼する力を今、使ったでしょう？ できないかな？ できるかな？ いや、できるかもしれない、と自分を信頼したんです。責任感を果たすという重圧もあったでしょうね。自分のところにラップがくるのはイヤだなんて。でも、その役割を果たしたじゃないですか。皆さん、必要とされたんですよ。そして仲間意識が高まったじゃないですか。一緒にやった、やるっていうのは、こういうことです。目標をはっきりもった。だから、達成した時に達成感を感じた。肯定的な言葉を使って、達成する時をイメー

ジしたじゃないですか？ これから先、ラップを使う度に思い出してください。5年ぐらいして、私と皆さんがどこかでばったり会ったりしたときにも、思い出してください」と語りました。参加者は、自分の中にある「8つの力」に改めて気づくことができただろうと思います。

先生はさらに「現実に向き合うというのは、何も力をもたないで向き合うんじゃなくて、自分にはこういう力があると思って向き合う。そして一つ一つ対処していく。私が一番言いたかったのは、皆さんには力があるということ。そのことを証明したかった」と話されました。事前課題にあった「心の3層構造」を取り上げて、「多くの人に『あなたはどのような人ですか』と尋ねると、ほとんどの人は2層目の『否定的な自己』を挙げるんです。ほとんどの人がです。ところが、自分に3層目の『真実の私』があることに気づくと、とても驚くのです。真実の自分は確実にあります。そこに気づいてほしいです」と語られました。

研修会終了後、参加者より「1回目より2回目が速くなった。成功体験をしたからこそ、よいところで終わらせたいという気持ちもあった。でも、だからこそあえて3回目を挑戦してみようとも思った。3回やってみたらこそその達成感を感じることができた」という感想がありました。

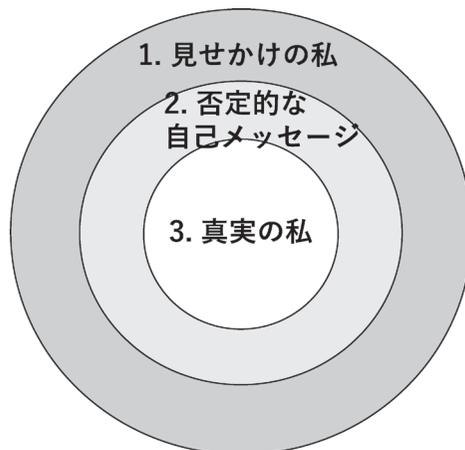


図2 心の3層構造

### ・ワーク3 タワーづくり

最後に、グループごとにタワーをつくるというワークを行いました。川村先生はタワーをつくる目的を「自分自身が生きてきた歴史の中には、苦しんだこともあればいろいろな強さを発揮したこともあったでしょう。そのいろいろな出来事に対処しながら、人生をどんどん積み上げていったようにタワーをつくっていき、見えないものを見えるようにしていく。つまり可視化することによって、自分の人生の出来事一つ一つが非常に価値あるものなんだと気づいてほしい」と説明されました。

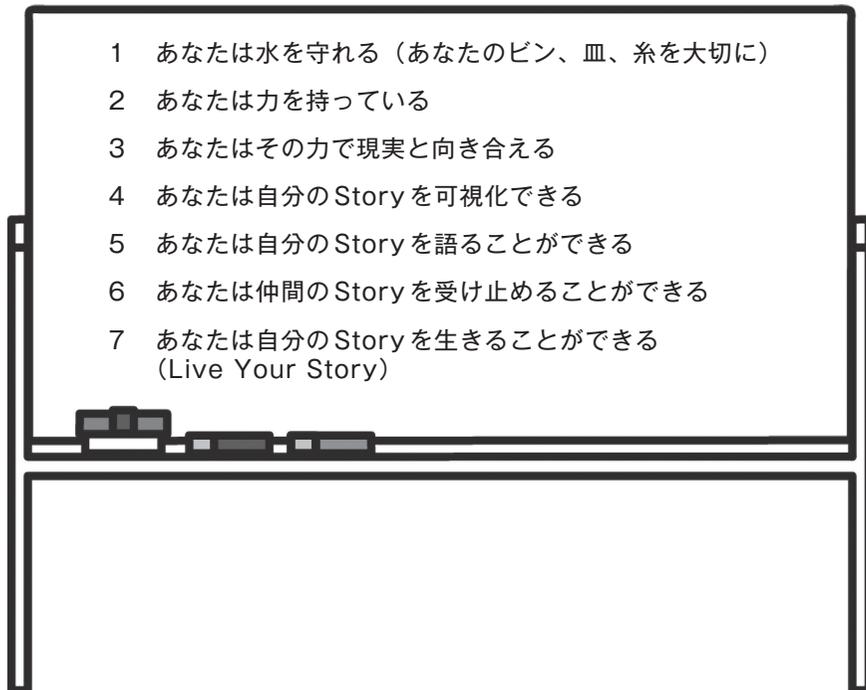
まず参加者は、タワーの土台をつくる役割と、その上にタワーを積み上げていく役割とに分かれるように伝えられました。次にスタッフが事前に準備した紙、布、リボン、ビーズ、落ち葉など、たくさんの材料の中から、自分の人生の出来事を表現するのに見合ったものを選んでタワーに貼りつけていきました。制限時間40分の中で、参加者はどのようなタワーをつくらうかと話し合いつつ、一人ひとり自分の人生の出来事を象徴するデコレーションを考えていきました。

完成したタワーの写真を10ページから掲載しています。

タワー完成後に、グループごとに一人ずつライフヒストリーを語る時間が設けられ、メンバー同士でこれまでの人生をふりかえり共有しました。

### ・川村隆彦先生からの7つのメッセージ

川村先生から7つのメッセージが届けられました。ここではできる限り、先生がお話された言葉をそのまま再現して記述します。



今日は8つの力についても学んだけれど、私から皆さんに向けてのメッセージが7つあります。それを伝えておきます。

1番最初のことは、あなたは水を守るってことです。皆さんが水を守ったので、ここにちゃんと水はあります。皆さんは自分の水を守るってことを忘れてほしくないと思います。それが1番最初のことです。その時に、あなたにとってのコップだとか、皿だとか、糸があったんです。その役目をする人たちがあなたのまわりにいます。その人たちを大切にしてほしいなと思います。水が溢れたかもしれないし、こぼれたかもしれないけど、そんな問題ではないですよ。それが現実というものじゃないですか。

2つ目が、あなたには、その水を守る力があるということです。力を持つってことです。その力について説明しました。今日は、その力を使いました。その力を使って、素晴らしいタワーを皆さんにつくらせていただきました。だから、その力を使ってくださいってことです。

3つ目は、その力で現実と向き合い、その力で現実とたたかうことができる。だから、その力があるということをよく理解して、その力で現実と戦うしかないということなんです。だけれども、力があるってことを覚えといてください。

4つ目は、自分のStoryを可視化できるということです。自分が生きてきたStoryがあります。そのStoryを、見えないものではなく、見えるものにできるということです。この中に皆さん自身も投影されていると思います。だから、それは、隠されたものではなくて、誰にも語られないものでもなくて、ちゃんと現実にごういう形になっているということです。皆さんは、自分のStoryをちゃんと可視化できるんです。その時、覚えておいてほしいことは、あなたのタワーは、誰かのタワーの一部でもあるわけですよ。そして、誰かのタワーは、あなたのタワーの一部でもある。そういうものなんですよ。つまり、あなただけの1つのちっぽけなタワーがずっとあって、1人っきりでいるわけではないということです。あなたのタワーをつくるために、あなたというタワーをつくるために、どれだけの人が関わってきましたか。少し想像してみてください。あなたというタワーをずっと支えて、守って、つくり上げるために、力を貸してくれた人の顔を思い出してみてください。だから、あなたが自分のタワーを自分だけの力でつくってきたというふうに思わないで、みんながつくってくれたんです。あなたは単独で存在していないということです。あなたのタワーをつくるために、それこそ大きな大きな犠牲を払ったり、力を貸してくれた人がいたと思いますよ。彼らのために、あなたのパワーがあると思います。だから、あなたが自分のパワーを諦めてはいけません。

5つ目は、あなたは自分のStoryを語りましたよね。素晴らしいことでしたね。それはもう話せないことではありません。どうして話せたのかというと、聴いてくれる人がいたからです。質問してくれる人がいて、それはそうだねと言ってくれる人がいたから話せるんです。あなたは自分のStoryを語った方がいいと思います。そして、語るごとにあなたは強くなると思います。私たちは自分のStoryを語るために強くなってきます。ですから、自分のStoryを語ってほしいなと思います。それをまわりの人たちはそこから影響を受けるでしょうし、そこから学ぶと思います。もちろん、うまくいったStoryもありますが、そうでないStoryもあると思いますが、それも含めて語ってあげてください。それを聴いて力になる人がたくさんいると思います。

6つ目ですが、皆さんは仲間のストーリーを受け止めることができました。皆さんは語る側でもあるけれども、受け止める側でもあるし、あなたにストーリーを語ってくれた人がいたら、それを受け止めて、そしてそれは素晴らしかったね、それは大変だったね、そういうふうを受け止めて返すことができました。そうやって私たちお互いに存在しているんですよ。つまり、そういう力があるということです。

そして最後は、あなたは自分のStoryを生きてきたし、そして、これからも生きることができるといことです。それは皆さんにとっても My Story、僕らから言うと Your Storyですね。だから僕は「Live Your Story」という言葉が好きで、あなたのStoryを生きなさいっていうことを伝えたいんですね。

この7つのことを僕は皆さんに伝えたいなと思いました。

### ・クロージング

全員で立ち上がり、ダイアナ・ロス (Diana Ross) の “If We Hold on Together” のメロディに振り付けをつけて歌いました。

最後に先生から「話し足りないことはないですか」と投げかけがあり、グループで研修のふりかえりや感想、今の気持ちなどが共有されました。

研修会終了後、参加者はタワーを囲んで写真撮影をしたり、連絡先の交換などを行いました。名残惜しい雰囲気を漂わせながら、皆さん笑顔でお帰りになりました。

(文責：竹沢昌子・森香苗)

タワーづくりのために集められた材料 (一部) とそれぞれのグループの作品は以下の写真の通りです。



材料 (一部)



Aグループ



Bグループ



Cグループ



Dグループ



Eグループ



Fグループ

川村 隆彦

Master of Social Work (ソーシャルワーク修士)、  
State University of New York at Albany

高齢、障害、児童、医療、精神保健分野での経験を経た後、教育分野に携わり、現在、神奈川県立保健福祉大学所属。ソーシャルワーク演習、実習等を担当している。これまで「自己肯定感」「ソーシャルワークの理論・アプローチ」「ソーシャルワークの価値・倫理」等を研究してきた。

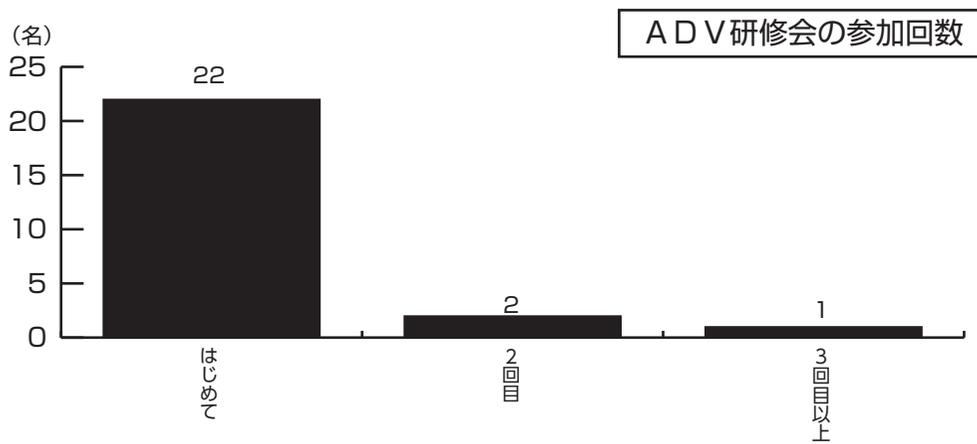
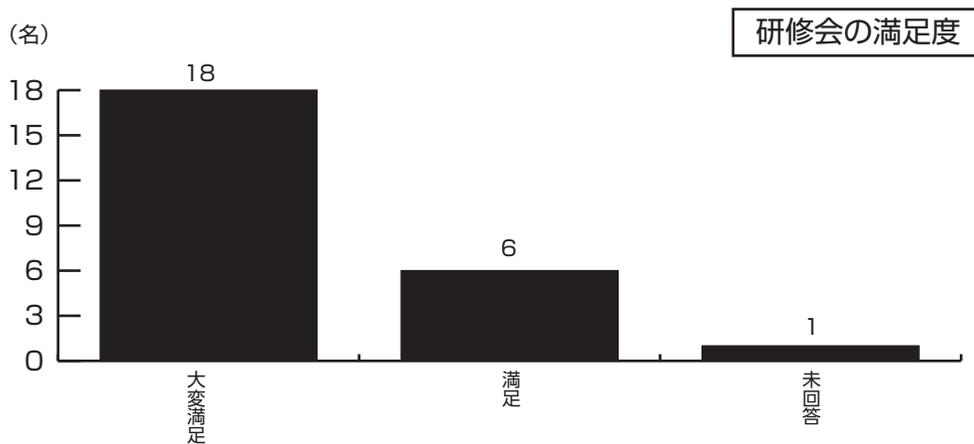
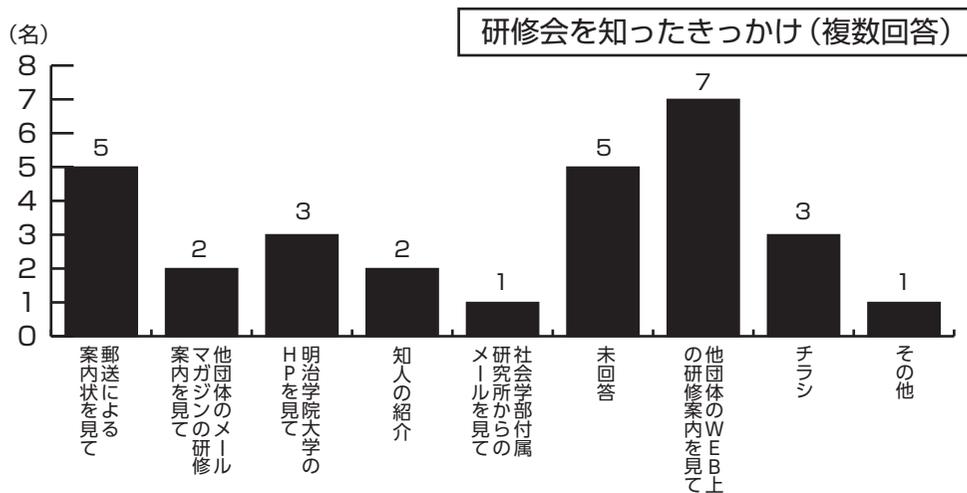
エスティーム教育研究所を立ち上げ、30年近く、日本全国を巡り、講演、研修、ワークショップを行ってきた。また問題を抱える個人や家族（夫婦）へのカウンセリングサービスを提供してきた。



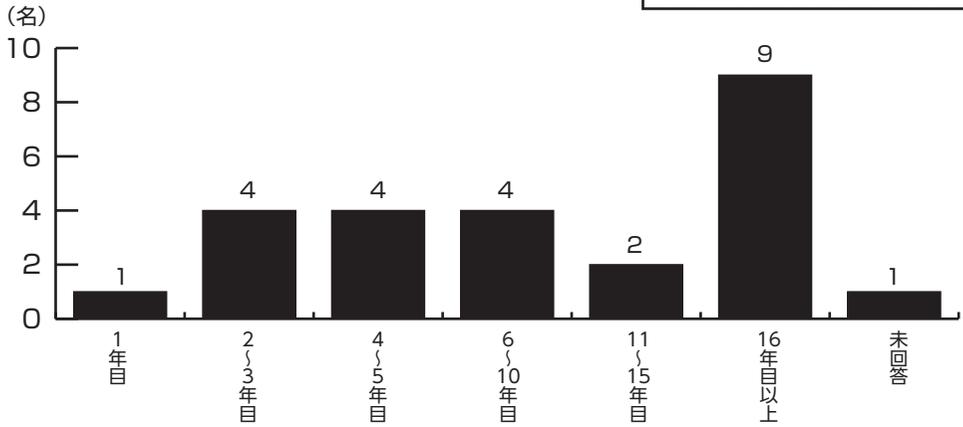
エスティーム教育研究所のHPはこちら



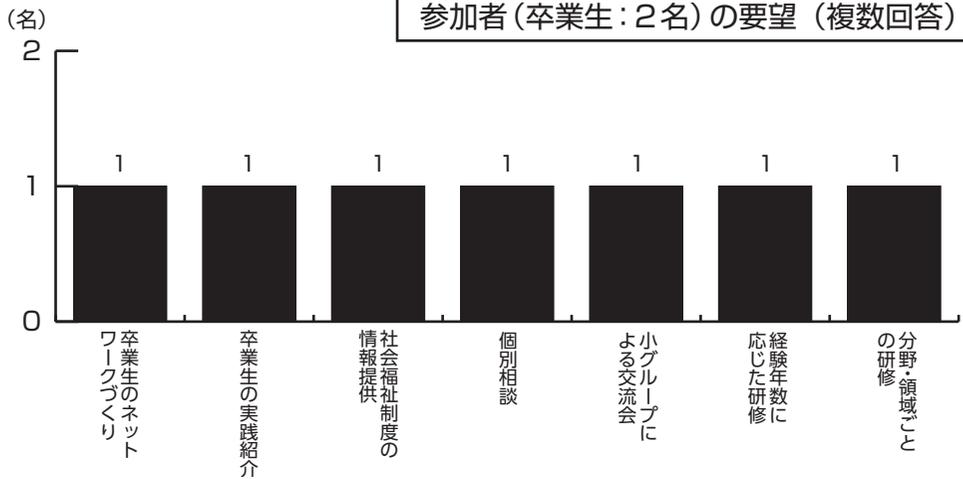
3. 参加者の基本属性・アンケート結果（25名より回収／当日参加者30名）



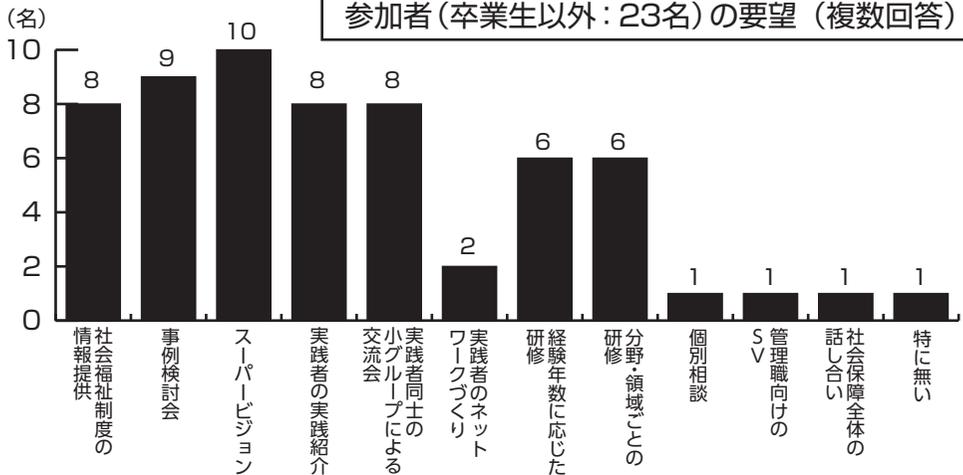
参加者の実践経験年数



参加者(卒業生:2名)の要望(複数回答)



参加者(卒業生以外:23名)の要望(複数回答)



## 第38回開催案内書

第38回「社会福祉実践者のための臨床理論・技術研修会」（通称「アドバンストコース」）

 MEIJI GAKUIN UNIVERSITY

# ソーシャルワーカーの「理想」と「現実」 —「ライフヒストリー」から見える輝きと強さを知る—

誰もが「人生の物語」を心の奥底にしまい込んだまま、話すこともなく生き続ける。だから本当の輝きは、誰にも気づいてもらえない。しかしあなたがその人生に共感し、彼らの語りを引き出すなら、思いもよらないほどの人の生き様、苦闘、強さに気づくだろう。しかし、そのためには、まず自分自身と向き合う必要がある。あなたの理想とは？ 現実とは？ そこにどんな葛藤、そしてどのような強さが潜んでいるのか？ こうした経験を通して、あなたは、自分自身の本当の輝きと強さを知るだろう。

日時：2024年11月30日（土）13:00～16:00

場所：明治学院大学白金キャンパス 2202 教室（対面開催）

対象：社会福祉実践者（本学卒業生含む）

定員：30名 要事前申込、先着順

内容：講師による講演およびワークショップ

講師：川村隆彦先生（神奈川県立保健福祉大学）



ニューヨーク州立大学大学院修士課程修了（Master of Social Work）

高齢、障害、児童、医療、精神保健分野での経験を経た後、教育分野に携わり、現在、神奈川県立保健福祉大学所属。

これまで「自己肯定感」「ソーシャルワークの理論・アプローチ」「ソーシャルワークの価値・倫理」等を研究してきた。



申込期限 11月26日（火）  
託児・手話通訳が必要な方は  
お早めにご連絡ください



主催・お問い合わせ

明治学院大学社会学部附属研究所 相談・研究部門 担当：竹沢・森  
mail:ssoudan@soc.meijigakuin.ac.jp tel:03(5421)5205



## 社会学部附属研究所相談・研究部門のLINE

社会学部附属研究所ではLINEで研修会やカフェといったイベント情報をお送りしています。

ぜひ、友だち追加をしてください。

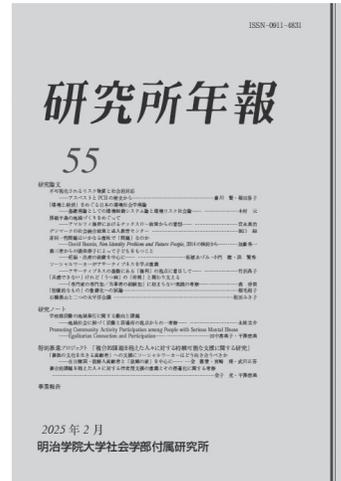


## 社会学部附属研究所の出版物

QRコードをスキャンすると、そのHPから各種出版物を閲覧することができます。是非ご覧ください。

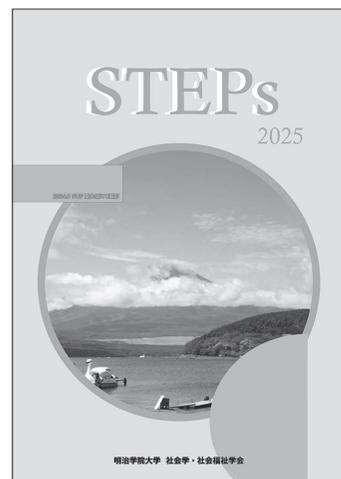
### ◇社会学部附属研究所年報

<https://soc.meijigakuin.ac.jp/fuzoku/annual-report/>



### ◇学内学会の学会誌『STEPs』

[https://soc.meijigakuin.ac.jp/gakunai\\_gakkai/steps/](https://soc.meijigakuin.ac.jp/gakunai_gakkai/steps/)



第38回社会福祉実践家のための  
臨床理論・技術研修会  
報告書

発行年月 2025年3月

発行者 明治学院大学社会学部附属研究所  
所長 加藤 秀一

明治学院大学社会学部附属研究所  
相談研究部門 編

〒108-8636 東京都港区白金台1-2-37  
TEL 03-5421-5204～5

印刷所 株式会社 興 栄 社

